

講義科目名称	英語コミュニケーション研究 III	副題	Pragmatics for English Education and Communication
英文科目名称	English Communication Studies III		

開講期間	配当年	単位数	科目必選区分
後期	1・2	2単位	必修選択
担当教員	吉村 敬子		

英語コミュニケーション	講義・演習
添付ファイル	

授業種類	<p>実務経験のある教員等による授業科目</p> <p><input type="checkbox"/>実務経験のある教員による授業科目</p> <p><input type="checkbox"/>実務家を招へいして実施する授業科目</p> <p>実務経験・授業での活用、招へいする実務家等</p> <p>授業で使用する言語</p> <p><input type="checkbox"/>日本語</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>英語</p> <p><input type="checkbox"/>その他</p> <p>アクティブラーニング</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>アクティブラーニング要素を取り入れている</p>
授業の内容 (概要)	このコースのサブタイトル、Pragmatics for English Education and Communication (英語教育と英語コミュニケーションの語用論) にあるように、このコースでは、円滑なコミュニケーションには欠かせない場面や状況に合った適切な言語使用、またその教育・学習について、「語用論」(pragmatics)の概念や理論を学び、どのようにそれらを英語教育やコミュニケーションに活かしていけるのかについて学びます。基本的に授業は英語で実施し、課題の読み書きも全て英語で行う。授業形式としては、事前に予習してきた語用論の概念などを授業内で確認し、それらをどのように教育や学習に応用・活用できるのかを中心に教員も含め多方向に討論する時間を多く設ける。それにより、語用論の概念をより深く理解し、実際の教育や学習への活用法について、またそれらにおいての課題を発見したり、どのように解決できるかなどのアイデアを共有し、実践的な活用に向けて考える。(双方向または多方向に行われる討論を伴うこのコースの目標は、語用論の基礎概念を学び、具体例を使いながら理解を深め、その上で、それらがどのように英語コミュニケーションや英語教育・英語学習に活用できるのか、また現在ではどのような問題点があるのかなどを、議論を通して見つけ出し、その解決に向けて考える力を養うことである。語用論の基礎としては、発話行為、ポライトネス理論、会話の推意 (conversational implicatures)や協調性の原理、決まった表現 (routine formulae)、などについて理解を深める。このコースは、国際コミュニケーション研究科のDP1 (ディプロマポリシー1) とDP3の達成に關与している。
授業の目的	このコースを履修後、受講生は次の力を身につける。語用論の基本的な概念を具体例を使って説明することができる。その語用論の理解を、自身の英語学習や英語教育においてどのように活用できるかを考え、その中でどのような課題があるのかを見つけ (課題発見能力)、その解決に向けて具体的に活用案を考える力を身につける。
到達目標	<p>第1回 授業の概要、自己紹介</p> <p>授業の概要をシラバスを使い説明し、扱う分野と内容、課題などを説明する。受講者の自己紹介を通して、これまでの自身の英語学習あるいは教育現場での経験、言語学や語用論に対する認識・知識、授業で学びたいことなどを共有する。テキストの第6章から10章から学びたいトピックを2つ選ぶ。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第2回 語用論能力について (第1章、ほか別途資料)</p> <p>語用論と統語論、意味論の関係、linguistic competence (言語能力) と pragmatic competence (語用論能力) の違いについて学び、実際の英語学習や教育現場での経験から、何をどのように学んだか・教えているかなど、グループ・ディスカッションを通して議論する。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第3回 言語教育と語用論 (第2章)</p> <p>語用論をどのように言語学習や言語教育に活かすことができるのかについて学び、受講者間、また教員を含めたディスカッションにより議論する。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第4回 発話行為とその種類、間接発話行為 (第3章)</p> <p>Speech actとその種類、間接発話行為について学び、その英語学習・教育への応用について議論する。人が言語表現を使ってどのような行為を行うのか、様々な表現があることを知り、その適切さについても触れながら、受講者同士でこれらについてどのように学んだか・教えているかを話し合い、課題などについても議論する。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第5回 発話行為と英語学習・英語教育 (第3章特に後半)</p> <p>発話行為について、その英語学習・英語教育への導入について考え、受講生が実際に授業で活用する具体例をまとめ、授業で共有する。受講生が自らの案を共有し、お互いに意見を言い合い、教員も含めその有効性などについて議論する。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第6回 協調の原理と会話の推意 (第4章)</p> <p>文の意味と話者の意味の違いを理解し、協調の原理 (会話の公理) により、どのように会話の推意が出てくるのか具体例を通して理解する。受講者同士で、これらについてどのように学んだか・教えているかを話し合い議論する。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第7回 会話の推意と英語学習・英語教育 (第4章特に後半)</p> <p>会話の推意や協調性の原理について、その英語学習・英語教育への導入について考え、受講生が実際に授業で活用する具体例をまとめ、授業で紹介する。受講生が自らの案を共有し、お互いに意見を言い合い、教員も含めその有効性などについて議論する。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第8回 学生発表1 (課題レポート1)</p> <p>ここまで学んだことから、自らの経験において語用論能力をどのように学んだか (教えているか)、もしくは学んでいないか (教えていないか) について具体例を挙げレポートにまとめ、授業で発表する。(それぞれの発表後に、Q&Aも含め、情報共有・議論を行う)</p> <p>第9回 ポライトネス (第5章)</p> <p>ポライトネスについてしくみや基礎概念、理論を学び、それらをどのように英語学習や教育に活用できるのかを議論する。特に、現在はポライトネスについてはどのような学習や教育が行われているかについて、受講者の経験について共有し、その課題などについて議論する。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第10回 ポライトネスと英語学習・英語教育 (第5章の後半)</p> <p>ポライトネスについて、その英語学習・英語教育への導入について考え、受講生が実際に授業で活用する具体例をまとめ、授業で紹介する。受講生が自らの案を共有し、お互いに意見を言い合い、教員も含めその有効性などについて議論する。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第11回 情報構造・Functional Sentence Perspective (第6章)</p> <p>文やことばの情報構造について考えるFunctional Sentence Perspectiveの見方や概念に親しみ、それらをどのように英語学習や英語教育に活かせるかについて議論する。特に、現在はこれらの情報や知識について、どのような学習や教育が行われているかについて、受講者の経験について共有し、その課題などについて議論する。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第12回 FSPと英語学習・英語教育 (第6章の後半)</p> <p>FSPについて、その英語学習・英語教育への導入について考え、受講生が実際に活用できる具体的な学習法やレッスン内容を、授業内で紹介する。受講生が自らの案を共有し、お互いに意見を言い合い、教員も含めその有効性などについて議論する。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第13回 社会言語学的視点からの談話分析 Interactional Sociolinguistics (第8章)</p> <p>文化的背景や社会的要素などを考慮して談話 (コミュニケーション) を分析するInteractional sociolinguisticsの概念などに親しみ、それらをどのように英語学習や英語教育に活かせるかについて議論する。特に、現在はこれらの情報について、どのような学習や教育が行われているかについて、受講者の経験について共有し、その課題などについて議論する。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第14回 Interactional Sociolinguistics と英語学習・英語教育 (第8章後半)</p> <p>Interactional sociolinguisticsで把握している内容について、どのように英語学習・英語教育へ導入できるかを考え、受講生が実際に活用できる具体的な学習法やレッスン内容を、授業内で紹介する。受講生が自らの案を共有し、お互いに意見を言い合い、教員も含めその有効性などについて議論する。(双方向または多方向に行われる討論を伴う授業)</p> <p>第15回 学生発表2 (課題レポート2)</p> <p>現在の英語学習・教育で、今まで見てきた様々な語用論の知識を語用論能力として身につけるうえで、課題となっていると感じる事例を挙げ、なぜそれが問題となるのかを説明する。また、それについての解決策を提示しレポートにまとめる。それについて、授業では口頭で発表する。(それぞれの発表後に、Q&Aも含め、情報共有・議論を行う)</p>
テキスト	Attardo, S. & Pickering, L. (2021). Pragmatics and its Applications to TESOL and SLA. 2nd ed. Wiley-Blackwell. ISBN: 978-1119554257
テキスト購入方法	各自購入 (Amazonなどで購入可能)

参考文献	Cohen, Andrews. (2018). Learning Pragmatics from Native and Nonnative Language Teachers. (ISBN: 978-1783099917) Ishihara, N. & Cohen, A. (2021). Teaching and Learning Pragmatics: Where Language and Culture Meet. 2nd ed. Routledge. (ISBN: 978-0367767082) Rover, Carsten. (2021). Teaching and Testing Second Language Pragmatics and Interaction: A Practical Guide. Routledge. (ISBN: 978-0367203030) Yule, G. (1996) Pragmatics. Oxford University Press.
成績評価の方法	予習・復習（discussion reflection含む）10%、具体的な活用例の紹介プレゼンテーションとディスカッション20%、課題レポート（2つ）50%、学生発表（2回）20%
教員への連絡方法	授業の前後、メール
履修上の注意	授業は全て（読み書きも発表も）英語で実施する。
授業外学修情報（予習復習）	授業前は、指定されたテキストの箇所を必ず読み、指定されたdiscussion reflectionに取り組む。また、紹介プレゼンテーションや発表がある場合は、準備をしっかりと行う。授業後は、学んだことを復習し、内容の見直しをする。1学期の授業外学修時間は合計30時間であり、1回の授業にあたり平均約2時間の予習・復習時間が求められる。
学生へのメッセージ	語用論の基礎を把握したいという方、また、それを英語学習や英語教育へ応用したいという方の履修を勧める。